

句動詞指導への示唆*

Implications for English Phrasal Verbs Teaching

—認知言語学と英語教育の接点を求めて—

: A Search for the Connection between Cognitive Linguistics and English Education

中川 右也**

NAKAGAWA Yuya

概要

句動詞は、ネイティブスピーカーによって頻繁に使用されている一方、ノンネイティブスピーカーにとって習得は難しく、使用されることも少ないと一般的に言われている。句動詞習得を困難にさせている要因は、動詞と不変化詞の部分の総和から、句動詞全体の意味が予想できないというゲシュタルト性によるものが大きい。中川・宮口・桃井(2011)は、イメージ・スキーマという認知言語学のツールを下敷きとしたイラストを使うことで、学習者が効果的に句動詞を習得できることを示した。本稿では、認知言語学の理論に基づき、言語の持つ意味の有縁性に着目しながら、句動詞をイラストを使って指導する方法を具体的に提示する。

1. はじめに

語学の学習で基本となるのは、語彙力を向上させることであるということは、どの教師も賛同するであろう。一昔前までは、単語帳等を配り、学習者に自学自習させ、教室では単語テストをすれば、それなりに語彙力の定着を図れたであろう。しかしながら、高等教育機関においても、リメディアル教育の必要性が益々大きくなっている今日においては、従来の方法で指導することは困難な現状である。語彙指導も例外ではなく、英語と訳語を板書し、フラッシュカードを用いて音読練習させる等、従来型の指導に加えて、さらに効果的に記憶する手助けとなる方法が求められている。学習者に無味乾燥に暗記させるのではなく、英語と訳語の有縁性に着目させ、納得しながら覚えらるる方法を模索することを試み、具体例を挙げながら示していきたい。

2. シノニム

受験指導では、よく見られる光景ではあるが、シノニムを黒板に書き、それらをイコールで結ぶ指導法は、暗記を促すという点においては、一見効率的なように思われるが、真のコミュニケーション能力を身に付けさせることを目的とした場合には有害であろう。

例えば *depend on* と *turn to* は「頼る」という意味に

おいてはほぼ同じであるが、使われるコンテキストは異なる場合もある。*depend* は「依拠」をあらわす *on* を従えるのに対して、*turn* は「方向」をあらわす *to* を従える。従える不変化詞が *to* であることから明らかなように、*turn* の語義は、回すことによって向きを“変える”ことにあり、*turn to* は、それまでの状況とは違った方向に変えるために行われる行為の意味合いが強くなる。それゆえ、*turn to* は後続に「獲得 (～を求めて)」をあらわす *for* がなければ、「頼る」の意味が生まれないのである。ここで、海外の辞書の定義を見られたい。

turn to

(1) to go to someone for advice, sympathy, or help

(LPVD)

(2) to go to sb / sth for help or information

(OPVD)

次の例文では、*turn to* を使うことによって、方向転換するまでの状況が文脈の背後に浮かび上がってくる。

(3) North Korea may have to *turn to* China for financial assistance.

* 原稿受理 平成23年10月3日

** 一般科目

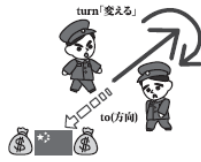


図1 TURN TO のイラスト
(中川・土屋 2011)

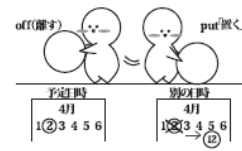


図2 PUT OFF のイラスト
(中川・土屋 2011)

turn to を使うことにより、北朝鮮がそれまでの政策を変えて、中国に経済支援を求めるようになったという状況を読み取ることができる。turn to の代わりに depend on を使った文では、こういった文脈の背後に隠れているものを示唆することはできない。

3. 意味の有縁性

学習者にとって句動詞の習得を妨げる要因の一つは、句動詞を構成する語から句全体の意味を推測することが難しいことであると言われている。句動詞に限らず、言語には確かに恣意性という側面もあるが、できるだけ語学教師としては言語の有縁性を探りだし、学習者が語彙を習得する際、記憶の定着の一助となるような理にかなった説明をするべきである。

例えば、単に put off の意味は「延期する」である、と述べただけでは、その語彙を説明した事にはならない。言語の有縁性に着目した指導方法が、句動詞の場合には特に効率的であろう。put off は、物事を、本来予定されていた日時から離して(off)別の日時へ置く(put)ことをあらわす。もっとも、これだけでは“延期”というニュアンスは出てこない。というのは、予定よりも前倒しするという事も考えられるからである。put off が、なぜ予定していた日時よりも前倒しにするのではなく、先延ばしにするという意味になるのかは、put off が until と共起することによって説明できる。つまり、put off は until と共起することで、予定していた日時から離して(off)別の日時まで(until)ある事柄を置く(put)ということをあらわし、「延期する」という意味になるのである。なお、until が共起しない場合もあるが、それは言語化されていないだけのことであって、背景に until という表現が含意されていることに注意されたい。

(4) The meeting was *put off* until next week.

4. 意味の差異

もしも教師が学生に「辞書を引くと run into, come across, run across はどれも『偶然会う』となっていてますが、違いはありますか？」と質問されたらどう答えるであろうか。学生にこのような知的好奇心に満ち溢れた質問をされると、教師としてはうれしいものである。日本語の訳語からはその意味の差異がわかりづらい英語表現もあり、英語のネイティブスピーカーに質問するのも一つの方法ではあるが、その意味の差異が生じる有縁性まで言及できる人は少ない。というのも、ネイティブスピーカーにとって句動詞のニュアンスの違いは説明できるが、それは無意識に獲得された言語感覚によるものだからである。例えば日本語のネイティブスピーカーである我々は、「～は」と「～が」のニュアンスについては答えられるが、次の例文における(5)が文法的で(6)が非文法的であるという理由を答えられる人は少ないのではないだろうか。

(5) 私は太郎が紹介してくれた人に昨日会いました。

(6)*私は太郎は紹介してくれた人に昨日会いました。

このように、ネイティブスピーカーでも意味の差異の有縁性について説明することは難しいこともある。一方、外国語としてターゲット言語を学ぶノンネイティブスピーカーは、意識的に言語を習得することが多く、このような問題に対して答えられる場合もある。英語のノンネイティブスピーカーである日本人英語教師の役割は、実はここにあるのではないだろうか。また、認知言語学は、言語の有縁性を知る手がかりを与えてくれるので、日本人英語教師にとっての強力な道具立てとなる。

run into, come across, run across における意味の差異を考えてみることにする。run into は「ぼったり出会う」というニュアンスを持っている。

(7) I *ran into* Taro in a store.



図3 RUN INTO のイラスト
(中川・土屋 2011)

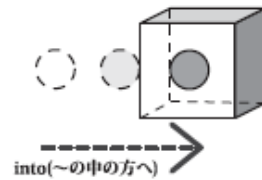


図5 INTO のイラスト
(中川・土屋 2011)

この“ばったり”という衝突に似たニュアンスは、不変化詞 **into** から生まれる。**into** は 16 世紀までは **in** と **to** に分けて使われていたこともあり、**in** と **to** の 2 語の意味が共存しているのである。**in** は「内包」を、**to** は対象となるものへの「方向」や「到達」をそれぞれ含意する。ここから **into** は、内部への到達、つまり「中の方へ」をあらわすのである。衝突に似たニュアンスは、**to** によって生み出されているのである。「到達」のイメージから、到達点をプロファイルすると、「接触」というイメージへと広がる。簡略化した **into** のイメージ・スキーマは次の通りである。

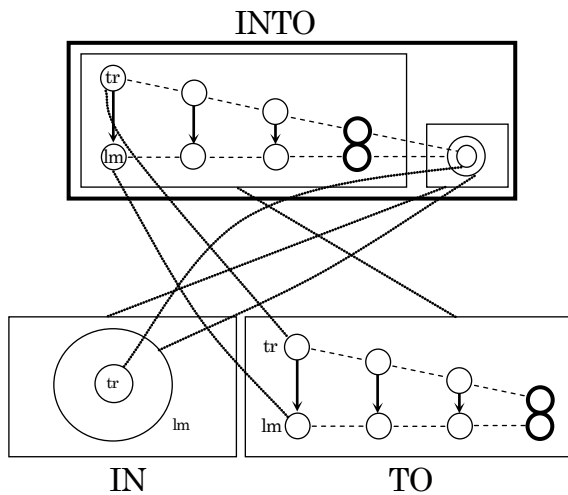


図4 INTO のイメージ・スキーマ

学習者に対しては、次のようなイラストを提示し、**into** は、対象の中に入る手前で、対象にいったん衝突に似た接触をしてから対象の中へと入っていくイメージであることに言及すると、感覚がつかめるかもしれない。なお、イラストでは、学習者への便宜を考慮し、**tr** を円形に、**lm** を四角形にし、**tr** の移動はグラデーションを使ってあらわしている。

run into は「偶然会う」という意味以外にも、「衝突する」という意味があるのだが、**into** の **to** に内在する意味によって、この「衝突」のニュアンスが生み出されるのである。また、「ばったり」という語の音感からも連想されるような瞬時の出来事であるのは、**run** が比較的速い移動をあらわす動詞だからである。**run into** は、比較的速い移動での最中、対象に衝突することをあらわし、「ばったり会う」、つまり「偶然会う」という意味になるのである。

次に、共に **across** と共起する **come across** と **run across** を見ていくことにする。

(8) I *came across* my old friend Kenji by the shop.



図6 COME ACROSS のイラスト
(中川・土屋 2011)

(9) Sometimes I *run across* someone who has never recovered from their bad experiences.



図7 RUN ACROSS のイラスト
(中川・土屋 2011)

across の語源は十字を意味する **cross** であり、「交差」のイメージを持っている。この「交差」のイメージから「偶然性」という意味が生み出されるのである。異なる対象の移動が点で交わるには、進行方向とその時間

が一致しなければ、ある点で二つの対象が交わることがないことを考えれば、この「偶然性」という意味を *across* が持っていることは必然であろう。*come* と *run* は共に移動をあらわす動詞であることから、移動の最中に異なるもの同士が偶然ある場所において交わることをあらわし、ここから対象が人であれば「偶然会う」という意味になるのである。しかし、*come across* と *run across* の間にも、ニュアンスの違いは少なからず存在する。G4 を使って *come across* の項目を引いてみると、「ふだん見かけない人に偶然出くわす」とある。一方 *run across* の項目を引いてみると、「偶然出くわす」としか書いていない。この意味の差異が生じる理由は、無論、*come* と *run* の違いによるものであることは明白である。*come* は本来、遠くから近づいて来るイメージを持っていることから、メタファーの介在によって、比喩的に、対象とするものは、ふだん遠くの存在として認識されるもの、つまり、身近でないものであることとなり、対象が人であれば、ふだんは見かけない人ということになるのである。

5. 身体に根差したメタファー

不変化詞と動詞が共起して、句動詞になると、様々な意味を持つようになるので、学習者は意味の推測が難しくなり、複雑に捉えがちになる。句動詞が様々な意味を持つようになるのも、不変化詞自体が多義的であるということが要因になっている。不変化詞が多義性を帯びるのは、不変化詞が身体に根差した「空間」や「位置」をあらわし、抽象的な事柄を具体的な位置関係に置き換えて人間が表現することに起因する。例えば *up* の用法の多義性として、位置的な「上方」にとどまらず、「出現」、「増大」、「完全」、「完了」、「意識」、「起動」などが挙げられる。人間が「上方」という位置的な関係から連想するメタファーの広がり、人間の豊かな感情や思考など、実に多くの事柄を表現することを可能にさせる。これは、何も英語に限った事ではなく、日本語においても“気分は上々だ”や“問題が浮上した”、“立ち上げる”といった表現を見ればわかる。けれども、外国語として言語を習得する際には、多義語を記憶に留めることはなかなか難しい。外国語における多義語の習得は、多義性についての知識をまとめる、一貫した中心的語義を示すことが手助けとなるのではないだろうか。例えば、次のようなイラストを学習者に提示し、スーパー・スキーマ（基本イメージ）からローカル・スキーマ（拡張語義）へと、中心的語義から多義性が拡張していく様子を示すのも有

効であろう。



図8 UPのイラスト

(中川・土屋 2011)

中心的語義から拡張された多義的な用法を習得していくことは、学習者が自ら類似表現のニュアンスの違いに気付く力を育む効用が期待できよう。一般的によく知られている表現の一つに、「～することをやめる」を意味する *give up* と *stop* がある。前者は永久的に、後者は一時的にやめることを含意する。句動詞 *give up* の *up* は、「完全」をあらわす用法であるがゆえに、完全にやめる、つまり永久的にやめるということが含意されることは、*up* の拡張語義についての知識によって示すことができる。このように、多義的用法を教えることは、学習者にとって大いに有効であると思われる。

6. 訳語の背後にある意味の深さ

訳語にはあらわれないニュアンスを生み出すのには、動詞の意味が影響している場合もある。一例を挙げれば、「解雇する」を意味する *lay off* は、“一時的に”というニュアンスが含まれる。*dismiss* や *fire* にはこの“一時的に”というニュアンスはない。この理由は、*lay* は横にして置くこと、つまり「寝かせる」という意味があり、寝ているものは、やがて起き上がるというメタファーを喚起させるからである。従って、*lay off* には“一時的に”というニュアンスが含まれるのである。*lay off* は、ある場所から対象を離して(*off*)いったん寝かせて置く(*lay*)ということから「(一時的に人を)解雇する」という意味になるのである。

(10) The worldwide car company has *laid off* more than 400 employees.

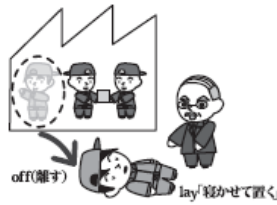


図9 LAY OFF のイラスト
(中川・土屋 2011)

他に、burst into と break into という類似した句動詞があり、共に「突然～をし始める」を意味するが、後者は break が元々「壊す」という意味を持っていることから、突然ある事柄を始めたことによって、関係や雰囲気などを壊すといったニュアンスを含むことがある。

7. 不変化詞一語の重み

句動詞は、一語の不変化詞の違いによって大きな意味の違いを生むことが多々ある。look to、look for、look about がその一例である。to と for は方向を含意することから似ている側面もあるが、to は対象となるものに「到達」していることまで含意する。



図10 TO のイラスト
(中川・土屋 2011)

従って、look to は、視線が対象に到達していること、つまり対象に「目を向ける」ことを意味する。

(11) She looked to the children. (中川・土屋 2011)

一方 for は、対象に到達していることまで含意しない。

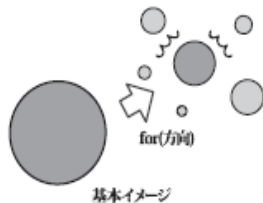


図11 FOR のイラスト
(中川・土屋 2011)

look for は目的とする対象に視線が到達できるように見ること、つまり「探す」という意味になる。

(12) She looked for the children. (中川・土屋 2011)

about は「周辺」を基本イメージに持っている。



図12 ABOUT のイラスト
(中川・土屋 2011)

句動詞 look about として使われると、周辺に目を向ける、つまり「周りを見る」という意味になる。

(13) She looked about the child's room.

他動詞の用法がある動詞に、不変化詞一語を付け加えることによって意味の違いが生じる例もある。believe は、in という不変化詞一語を加えると“存在”を信じるという意味になる。これは、believe in がある対象の中(in)を信じる(believe)ということであらわすからである。目で見える外面とは異なり、目に見えない存在の内面を信じるということは、その「存在を信じる」ということに意味が繋がるからである。

(14) I don't believe in gods in human form.



図13 BELIEVE IN のイラスト
(中川・土屋 2011)

類似例として他に enter into が挙げられる。enter (入る) は、特に入学試験などの受験指導においては、自動詞と間違えやすい他動詞として説明されることが多いようである。また、enter=go into として結び付けて教えられることも少なくない。実際には enter into という表現も存在し、句動詞として使われる場合には、「(活動などに) 加わる」や「(関係・協約などを) 結ぶ」という意味になる。enter に不変化詞 into (中の方へ) を付け加えることによって、さらに対象の奥へと入り込んでいくイメージになり、ここから単にある場所の中に入るというのではなく、さらにその場所の中で行われている活動

の中へと入っていくことをあらわし、メタファーの拡張によって、先ほどのような意味になるのである。

(15) He *entered into* a conspiracy with the children against the teacher.

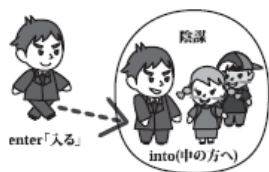


図14 ENTER INTO のイラスト(1)
(中川・土屋 2011)

(16) Doctors may *enter into* contracts with private hospitals.

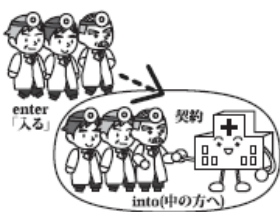


図15 ENTER INTO のイラスト(2)
(中川・土屋 2011)

8. おわりに

本稿では、認知言語学の知見に基づいた句動詞の指導方法の一例を提示した。恩師の一人に「その時、その場所、そこにいる学習者と教師でしかできないことをなるべく実践しなさい」という言葉を頂いたことは記憶に新しい。辞書を引かせて単語の意味を学習者に調べさせることも語彙指導の一つである。しかし、辞書も引かせずに、ただ辞書に載っていることを板書し、述べただけでは、本当の語彙指導とは言えない。学習者は、辞書に載っている説明のみでは理解できず、また、その語彙を習得するための効果的方法を求めているのである。教師の果たすべき役割は、創意工夫がなされた語彙指導を実践し、語彙の定着をさらに促進する方法を学習者に示すことにある。そのために教師は、いかに上手く教えるかを追求するのみではなく、自戒をこめて言えば、常に英語という言語をさらに深く研究する必要もある。そういった意味において、英語教育に応用できる可能性を秘めた認知言語学で得られた成果は注目に値する。最後に、佐藤一斎の「言志四録」の言葉を引用し、この論文を締めくくりたいと思う。

無能の知、無知の能

無能の知は是れ瞑想にして、無知の能は是れ妄動なり。
学者宜しく仮景を認めて、以て真景と做すこと勿るべし。
(堯十一)

辞書

LPVD : Longman Phrasal Verbs Dictionary. 2000

OPVD : Oxford Phrasal Verbs Dictionary for Learners of English. 2006

G4 : Genius English-Japanese Dictionary Fourth Edition. 2006

参考文献

Kövecses, Z. (2001). A cognitive view of learning idioms in an FLT context. In Pütz, M., Niemeier, S. & Dirven, R. (eds.) *Applied Cognitive Linguistics II: Language Pedagogy*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Kurtyka, A. (2001). Teaching English phrasal verbs: a cognitive approach. In Pütz, M., Niemeier, S. & Dirven, R. (eds.) *Applied Cognitive Linguistics II: Language Pedagogy*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.

Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

中川右也・宮ロ一徳・桃井活果 (2011) 「イメージを使った語彙指導の効果—句動詞について」『英語授業研究学会全国大会発表資料集』23: 43-46.

中川右也・土屋知洋 (2011) 『「なぜ」がわかる動詞+前置詞』東京: ベレ出版.

Ogden, C.K. (1931) *Debabelization*. London: Kegan Paul.

Rudzka-Ostyn, B. (ed.) (1988). *Topics in cognitive linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.

Rundell, M. (2005) Why are phrasal verbs so difficult? *Humanising Language Teaching*, 7. Available at <http://www.hltmag.co.uk>: Pilgrims.

寺沢芳雄 (編集主幹) (1997) 『英語語源辞典』東京: 研究社.

謝辞

本研究は、平成23年度～24年度科学研究費補助金(若手研究(B) 課題番号: 23720307)に基づく調査の一部である。